

であるが、それでも気になる点について触れておきたい。

まず、タイトルにある「近代日本」という分野の区切り方は有効だろうか。本書で使われた史料はほとんど近代日本語の散文であるという意味ではそれでもかまわない。しかしそのことが「近代日本」というものを安全な密閉空間にしている危険性がある。本書では、古典漢文も近代中国語も朝鮮語も（笹沼論文を別にして）史料に含まれない。西洋語についても断片的な語彙は参照されているが、西洋語による概念の同時代のグローバルな（西洋諸国だけでなく中国・朝鮮を含む）広がり意識されていまいようである。まるで「近代日本の思想」は近代日本散文の文体と語彙のみで成立しているかのようである。

もう一点は、明確な反西洋化主義、土着主義の思想が検討対象にならないのは不思議である。個人主義も男女平等も自由な移動も大嫌いな人たちにも思想のメディアがあり、中央の指導的知識人との協力や葛藤関係があった。研究対象選択にあたってモアレートな立場を好ましいとする共有された空気でもあったのだろうか。なお、文献リストで当該章の執筆者のものだけ五十音順でなく末尾に置くというのは不必要な謙遜である。

（立教大学教授）

岩田真美・桐原健真編

## 『カミとホトケの幕末維新』

——交錯する宗教世界——

（法蔵館・二〇一八年）

繁田 真爾

本書が世に問われた二〇一八年は、いわゆる「明治維新一五〇年」にあたる年であった。そのことは偶然ではなく、「あどがき」によれば、その「節目」に合わせて本書を出版することに著者たちのこだわりがあったらしい。ただしそれは、単に節目を記念したいからということではない。逆に、「維新」を日本の近代化の出発点として言祝ごうとする、政府をはじめとする各種行事などへの違和感、あるいは「維新」によってそれまでのすべてが改められたとする固定的歴史観への異議申し立てこそ、本書が目指そうとしたところで、そのスタンスは明快だ。そうした本書のねらいについては、編者の一人、桐原健真による「はじめに」に詳しい。ここでは、桐原が繰り返し強調している、次の二点に注目しておこう。一つは、従来の学術研究では「近世と近代との断絶性」を強調する研究が多いが、本書では幕末維新时期という時代を、むしろ近世と近代を「架橋する結節点」として理解したいということ。いま一つが、（政治や経済ではなく）思想や宗教などの「文化史」の視座からそのこ

とを試みたい、ということである。こうした本書のねらいについて、桐原は「近世の知的営為のうち近代の萌芽を見出す」のではなく、「むしろ近代といわれている時代のなかに、近世的な世界観や思惟様式がいかに継承あるいは展開されていたのかを、思想・宗教の面から」問いたい、とも説明している。

いわば本書は、歴史・思想史研究における「幕末維新时期」の可能性の再発見を目指した、新しい試みの書である。そのような大きな構想のもと、本書には総勢二名の研究者が参加し、論文一二本とコラム一三本が収められている。従来の専門区分では「近世」と「近代」にそれぞれ分かれている研究者たちが、同じ目的のもと一堂に会するとき、いったいどのような歴史像が提示されるのであろうか。本書では「はじめに」で各論文の概要がまとめられているので、重複は避けて、各論の意義を示すようなかたちで掲載順に紹介してみたい（多岐の話題にわたるコラムも本書の見どころだが、紙幅の関係で本書評ではふれられない。ぜひ直接手にとってみていただきたい）。

第I部では、「維新とカミとホトケの語り」と題して、幕末維新时期の宗教世界についての学術的な叙述そのものが検討される。「ことばは、認識のもつとも根源的な基礎としての観念を形作る」（九頁）という立場から、これまで私たちはどのような幕末維新时期の宗教状況を語ってきたのか、その自己相対化のための試みといえよう。

上野大輔「神仏分離研究の視角をめぐって」は、これまで膨大な研究史が存在する「神仏分離」「廃仏毀釈」研究の大きな流れと現在の問題点をコンパクトに整理した論考である。なかでも、安丸良夫や羽賀祥二たち、戦後を代表する諸研究に対する批判的コメントは、その当否も含めて、検討に値しよう。「仏教抑圧は神仏分離の主たる目的・趣旨ではないと考えられる」（四一頁）という点に、先行研究を批判的に乗り越えようとする上野論文の立場がある。論考の最後には、今後の神仏分離研究で「求められる視角」が二点にまとめて簡潔に提示されており、今後の研究の前提としてぜひ踏まえておきたい提言である。

オリオン・クラウタウ「日本宗教史学における廃仏毀釈の位相」は、「廃仏毀釈」をめぐる通説が近代においてどのようなプロセスで形成されていったのか、明らかにしようとする試みだ論考である。言説（記憶の場）の発生と展開を追う俯瞰的な方法によって、クラウタウ論文ではいくつかの興味深い事実が指摘される。なかでも、「廃仏毀釈」を日本の「伝統」の例外的な事象としてみる「融和的アプローチ」と、マルクス主義の影響による社会経済史的観点から、それを日本史を前後にわけると象徴的な事件とする「断絶的アプローチ」の二つに、これまでの「廃仏毀釈」研究は大別できるという指摘は、示唆的である。このように私たちの学知そのものの自己反省を一度くぐることによって、日本宗教史における最重要テーマの一つである廃仏

毀釈研究は、初めて新しい地平へと進むことができるだろう。

三浦隆司「『世直し』の再考察——宗教史的観点から」は、かつて人民闘争史研究の中心的テーマでもあった「世直し」を論じる。三浦論文のポイントは、学術用語（エティック）としての「世直し」と、資料用語（エミック）としての世直しを区別しながら、両者の間に存在してきたズレを指摘しつつ、三浦としては後者の資料用語としての世直しに今一度立ち返ること、その「実像」に迫ろうとする点にある（本論では、江戸時代中後期における世直し大明神の事例に注目）。三浦が強調するよ  
うに、「世直し」は、従来ともすれば「反封建的・革命的要素を含む変革思想または運動形態」として、研究者の主観がとくに仮託されがちな概念であった。しかし一九世紀以前、すでに浄瑠璃、能、仮名草子などで世直しという言葉がみられ、それらは「厄除け」と「縁起直し」の二つの意味合いで使用されていたという指摘は、興味深い。

青野誠「『民衆宗教』は誰を語るのか——『民衆宗教』概念の形成と変容」は、戦後の「民衆宗教」研究を開拓してきた村上重良と安丸良夫の二人に焦点を当てる。青野論文は、「民衆宗教」研究が生まれてきた同時代の社会背景にも丁寧に注目しており、研究主体の立場性に対する著者の関心がうかがえる。

青野によれば、村上は、靖国神社国営化運動など同時代の問題を背景に、「民衆宗教」がいかに国家神道の圧力を受け、統制の下に屈服してきたかという点に主眼を置いた。一方の安丸は、

「民衆」は革命主体とはなり得ないという前提に立ちつつ、彼らが国家権力に対抗し、主体形成をしていく可能性を描き出すとした、とする。ただし、両者とも国家権力への対抗軸として「民衆宗教」を位置づけており、それこそが「民衆宗教」研究の原点であったこと、そして七〇年代を境とする安丸説の変容についての青野の指摘は、ともに重要だろう。

第Ⅱ部では、「新たな視座からみた『維新』」と題して、「近代化を主題とするなかでは等閑視されてきた事象」を中心に光を当てる。そのねらいは、「幕末維新期」が政治的には断絶性が際立つのに対して、「非政治的側面では、ときに維新以後にも展開する文化史的状况を準備したという意味で連続性を有している」（二二頁）ことを、実際の歴史叙述を通して提示することにある。

岩田真美「幕末護法論と儒学ネットワーク——真宗僧月性を中心に」は、これまで「近代仏教」の形成を妨げるものとして批判的に論じられてきた月性らの護法論を、「近世と近代をつなぐ思想」として、新たにとらえ直そうと試みた論考である。ポイントとなるのは、同時代の排仏論に直面した仏教者たちが形成していた、同志的な「儒学（漢学）ネットワーク」である。従来、「護法・護国・防邪の一体論」を特徴とする護法論の形成は、仏教と諸思想との対立が契機として強調されてきた。しかし護法論の形成には、実は「僧侶と儒教的知識人による同志

的ネットワーク」が重要な役割を果たしていた事実を、岩田論文は明らかにしている。偏狭で排他的な思想という評価が一般的であった護法論の、意外な言説背景の広がりをも明らかにすることで、幕末仏教史の新たな一面を示してみせた論考である。

桐原健真「排耶と攘夷——幕末宗教思想における後期水戸学の位相」は、近代日本のナショナリズム形成にあたって大きな影響力をもった後期水戸学において、儒仏神の三教やキリスト教がいかに認識され、これらに対していかなる実践が展開されたのか、検討した論考である。桐原が導きの糸とするのは、「尊王攘夷」という言葉にイデオロギーである。後期水戸学の代表的イデオログであった藤田東湖や会沢正志斎たちの言説をみるかぎり、「水戸学における「攘夷」とは、対外的な軍事行動ではなく、キリシタン禁制すなわち「排耶」であった」（二七七頁）という指摘は、とくに注意すべきであろう。だとすれば、近代日本におけるナショナリズムの深層は、やはり宗教思想（およびその認識）をふまえてみなければよく理解できないということであり、そこに光を当てようとするところにこそ、本書の意義があるのだともいえる。

ジャクリン・ストーン「維新前後の日蓮宗にみる国家と法華経——小川泰堂を中心に」は、従来の先行研究が日蓮主義の起源を主に明治以降に求めてきたのに対して、その源流は実は徳川時代（特に幕末）の思想状況に求められるべきではないかとする立場から、著された論考である。在家を中心とし、積極

的な折伏活動に取り組み日蓮主義者の象徴として、本論考では、幕末維新の転換期を生きた在家居士・小川泰堂（二八一—四一七八）に光を当てる。小川が生涯をかけて校訂した日蓮の遺文集はその後の研究の基盤となり、同じく彼が著した日蓮の伝記は「屈指の人気を誇った。泰堂が「日蓮主義運動の重要な先駆者」であり、「幕末から明治初期において、折伏を復興しようとする動きが主に在家信者の手によって促進された」ことに注目するストーンの指摘は、近年とみに深められてきた日蓮主義研究に、重要な知見を提供するものだろう。

ジョン・ブリン「明治維新にみる伊勢神宮——空間的変貌の過程」は、千数百年にわたる伊勢神宮の歴史において、最大かつ劇的な転換期であった明治維新を境とする神宮の変貌に注目した論考である。本論文では多くの絵図を示しながら、その変貌を視覚的にも浮き彫りにしており、説得的だ。ブリンによれば、内宮と外宮の間に存在した遊郭に象徴されるように、「聖性と俗性の混在」こそ、近世伊勢の一大特徴であった。しかし維新後には、近代国家の君主（天皇）が祖先を祀る大廟として、神宮は再編成されていく。たとえば、（全国世帯の九割までを檀家としていた）約六百家もの御師が廃止され、檀家ネットワークは崩壊、参拝者も激減していった。論文では、その後の神都構想による復興の取り組みにも触れているが、維新後に庶民の信仰世界から神宮が切り離されていく過程こそ、本論考のみどころであろう。

第三部では、「カミとホトケにおける「維新」の射程」と題して、「維新後における宗教世界の実像」に迫る。ねらいは先述の第二部と重なる部分が多いが、いずれの論考もこれまで「前近代的」として閑却されてきた事象に光を当て、そのことで「維新」という経験の意味を問い直す試みとなっている。

星野靖二「幕末維新期のキリスト教という「困難」」は、当該期のキリスト教を論じることの「困難」を分節化しながら、それを乗り越える方途をさぐる。星野は当該期の「キリスト教」を、「表象」としてのそれと、「実態」としてのその二つに大別する。「表象」としては、しばしば既存の秩序を外側から揺るがすものとして想念されたが、それらを総体としてとらえること自体「困難」だとする。「実態」としては、幕末維新期が充分に取り上げられず、かつ規範的研究に傾きがちで、近年では「文化史」的な研究が試みられている。「表象」と「実態」の両者を架橋して、「キリスト教」を総体として描くためには、仏教史・国学・儒学などの研究蓄積を広く検討しつつ、日本という枠組みも外しながら、「俯瞰的・横断的な視点」の設定が必要だというのが、星野の主張である。新しい日本宗教史の解明には、本論のように「困難」の直視から出発することが、重要だろう。

引野亨輔「幕末／明治前期の仏書出版」は、当該期の仏書出

版の検討を通じて、これまで自明視されてきた「通説」を問い直すとした論考。明治期に伝播した西洋の活版印刷が、遅れた木版印刷をたちまち駆逐していった——というのがここで問題となる通説だ。しかし引野によれば、江戸時代を通じて確立された本屋の出版戦略（寺院など文化的権威と結託して、門人集団に一定部数の専門書売り捌く）は明治前期においてもほぼ変わることなく、木版印刷はその業態に親和性の高い技術であり続けた。さらに読経や書き込みを基本とする伝統的宗学にとつて、木版印刷や和装製本こそ、最もふさわしい様式だった（仏書出版で活版・洋装製本を導入したのは、哲学書院のように一般読者も対象とした一部の新興出版社）。技術・出版者・購読者の視点から輻輳的に展開する引野論文は、謎解きのように明快な論旨と相俟って、出版史研究の面白さと可能性をよく伝えてくれる。

谷川稷「仏教天文学を学ぶ人のために——佐田介石と幻の京都「梵曆学校」が意味するもの」は、幕末維新期の代表的な仏教天文学者・佐田介石の歩みをたどる論考。仏教天文学とは、仏典の世界観に即して天体の運行を説明し、暦の作成に役立てる学問だ。その学統を継いだ介石は、仏教的世界観を視覚化した器械「視実等象儀」を完成させ、地動説に対抗し、須弥山説の護持に文字どおり奮闘した。しかし政府は太陽暦を採用し、仏教天文学は「適切でないもの」と位置づけられていく（そして「梵曆学校」が開かれた一八八〇年頃を最後に潰えていく）。谷

川は、「仏教天文学は西洋嫌いの頑固者・排外主義者たちが信じる内輪の世界、という印象だけが強く残ることになった」と指摘する。私たちの認識も、こうした枠組みの延長にあるのだろう。しかし確かに実在した世界観を理解することは、現在を反省的に振り返る歴史研究にとって、特に重要な課題であろう。

林淳「社寺領上知令の影響——「境内」の明治維新」は、一八七二年から実施された社寺領の上知政策と、それに伴い複雑に交錯した社寺・行政・法律・学術の関係を考察した論考。政府が上知令を布告し、社寺から土地を没収しようとしたことは、「長い仏教史のなかでも先例のない衝撃的な事件」であった。

土地の下戻しを求めた社寺は、政府と行政裁判を繰り返したが、一九一〇年、国に境内地返還を命じる画期的な判決が出る。その背景には、中田薫らの法制史学の影響があった。一方で三上参次や辻善之助ら国史学者たちは、国から委託された研究のなかで判決を批判し、「境内官有説」を訴えた。ここに林は、「民法的思考がもつ公私観や法人概念と、国史学的思考がもつ国家中心史観」の間にある「埋めがたい溝」を指摘する。土地制度という一見古典的な視角から、仏教史における「近代」という新しい通史的展望が開かれる点に、林論文の面白さがある。

以上、各論考についてその意義を中心にコメントしてきた。

評者はこれまで明治期を中心とする近代史研究に取り組んできたが、本書を通読して、「前近代」を視野に入れて立論するこ

との大切さをあらためて痛感した。際限のない専門分化が進む今日、従来の時代区分を問い直しながら架橋しようとする試みは、ますます重要性を増しているだろう。その視座や方法はそれぞれの研究において応用可能なはずであり、本書は、そのための具体的なヒントを私たちに示してくれる。

また本書は、初学者への入門的な役割のみならず、研究の最前線を踏まえながらそれを一歩前進させようとする水準の高い論考が揃っている。しばしば相互の論考を参照しており、執筆者間でよく連携と意思疎通がとれている印象も受けた。これも、二〇一〇年から長い時間をかけて共同研究を積み重ねてきた成果といえるだろう。単に個別の論説を並べただけの論文集も少なくないなか、本書は共同研究としての成果が際立っていると  
思う。

ただし、各論で近世―近代をつなごうとする試みはおおむね成功していると思うが、本書全体としてみた場合はどうだろうか。近世と近代を各論で架橋してみた結果、全体として「何が見えてくるか」ということは、はっきりと明示されておらず、この点についての考察は今後の課題として残されているだろう。この点について描くことができるのか。幕末維新期の宗教思想をいけば、各論考をどのように横につないでいき、大きな歴史像として描いてみるることができるのか。幕末維新期の宗教思想を歴史のなかに位置づけるためには、この点は、どうしても避けることができないポイントとなるはずである。最後に、幕末維新期における「カミとホトケ」の全体像に迫るために、評者な

りに考えてみた手がかりを、本書のなかから試みに二つほど拾ってみよう。

たとえば、桐原論文では幕末の仏教者たちの排耶論が、「地上の国を第一に考える心性」、つまり超越性を喪失して現世性を重視する特徴を有していたことが指摘されている。しかもそれは、近世初期の仏者たちが「大道」や「天道」といった「超越的な世界観・宇宙観」に基づいてキリスト教を批判していたことから大きく変質しており、そうした言説のひとつの源泉となったのが後期水戸学であったという（一八七頁）。ここで議論されているイデオロギーやコスモロジーの超越性／現世性の問題は、思想史を大きな視座から描こうとするとき、注目すべき論点のひとつであろう。

また星野論文では、近世から近代への転換に際して、宗教的世界に対する統治者の規定において「邪正」の逆転が起こったという、大橋幸泰の説が参照されている（明快な「邪」から曖昧な「邪」へ、曖昧な「正」から明快な「正」へ。二八三頁）。大橋の場合は近世日本の「潜伏宗教」研究から導かれた知見だが、これも個別の事象をこえて、「正」と「邪」という大枠から近世―近代の転換の意味を包括的にとらえてみようとする、注目すべき試みであろう。

もとより、近世と近代の架橋も、まずは個別具体的な事象の検討から始めるしかなく、それは歴史研究として至極順当なプロセスではあろう。だが、そこからのように大きな歴史像を

描いてみることができるかは、別して考察を要する重要な課題だと思う。そしてそのための手がかりは、すでに挙げたもの他にも、本文のなかにおそらく存在しているはずである。本書で提示・論及された多様な歴史像を踏まえながら、さらに大きな視座に立った斬新な議論がこれから触発されていくことを、期待したい。

（日本学術振興会特別研究員）